

《彦火々出見尊絵巻》制作の意義に関する一考察

苫名 悠 京都大学

《彦火々出見尊絵巻》(原本は現存せず)は、皇祖神である彦火々出見尊(弟の尊)が、龍王の力によって火闌降命(兄の尊)を屈服させる説話を絵画化したものであり、その物語の淵源は『日本書紀』に求められる。模本から見て取れる本作の作風、及び本作の伝来に鑑みて、本作の原本は後白河院の命によって制作されたとする見方が一般的である。では後白河院は何を意図して天皇家の起源譚の絵画化を企図したのであろうか。本発表では、後白河院が置かれていた政治的状況に注目し、本作制作の意義について考察したい。

先行研究では、本作の発注者たる後白河院が本作の登場人物に実在の人物を仮託し、それによって何らかの主張をなさんとしていたと想定されることが多い。これらの研究において共通するのは、弟の尊=後白河院、兄の尊=崇徳院として、本作が保元の乱における後白河院とその兄崇徳院の対立を暗示していると解釈することであるが、この点に発表者は疑問がある。現在日本史学では、後白河院の父鳥羽院の構想において、後白河院が王家の傍流に位置づけられていたことは定説化しているが、ここで注意しなければならないのは、崇徳院もまた鳥羽院によって傍流に押しやられており、鳥羽院の構想において王家の正統とされていたのは、二条院であったことである。寵姫平滋子との間に儲けた皇子、高倉天皇の王朝における院政の確立を志向する後白河院にとって、自らの系統の優越を主張すべき相手は、崇徳系統ではなく二条系統であったと考えられる。

また先行研究において、本作中の龍王と龍王の娘には、それぞれ平清盛とその娘徳子が仮託されている。このことは先学が指摘する通り、後白河—高倉の王権が平家の力によって支えられるさまを表すと解釈することが可能である。ただ、本作細部の観察によって明らかとなるように、本作制作者による龍王や龍王の娘の描写は、決して好意的なものではない。また『日本書紀』の記述に相違して、本作では、龍王の娘が産んだ皇子の子孫が帝になることは語られない。後白河院にとって、清盛を外祖父とする皇子の即位は望ましいことではなかった。

これらの考察から、本作制作の意義について以下の推測が導かれよう。すなわち本作は、後白河—高倉の系統が二条—六条の系統に優越すること、また、高倉王権が清盛の武力によって支えられることを示しているのではなかろうか。ただし、平家一門に対する後白河院の視線は冷ややかである。徳子の産んだ皇子の子孫が帝になることは暗に否定され、高倉天皇の政権が末永く続くことが主張されるのである。

本来王家の傍系であった後白河院にとって、絵巻の収集・制作は、正統性を獲得し喧伝するための重要な手段として機能していたと考えられる。王家の起源にまつわる物語を描いた本作は、後白河院の絵巻制作事業が有していたそのような政治的側面を、最も端的に示す作品の一つであるといえよう。

(とまな・ゆう)